

# シニアのICT利用に関するライフスタイル・アプローチ（1）

## — シニアの「日々の活動」と「人間関係」による類型化の試み —

飽戸 弘<sup>1</sup> 栗原 一浩<sup>2</sup> 吉良 文夫<sup>2</sup> 松本 健太郎<sup>2</sup> 栗原 俊介<sup>2</sup> ○水野 一成<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 東京大学名誉教授      <sup>2</sup> NTTドコモ モバイル社会研究所

### 1. 研究背景

高齢化率が26%を超え[1]、我が国は本格的な超高齢社会に突入している。超高齢社会がもたらす社会的課題は、高齢者の孤独（単身世帯の増加）、労働力人口の減少、社会保障費の増大などますます深刻化している。その一方、元気で知識やノウハウを豊富に有している「アクティブシニア」が多く存在し、今後も増え続けると予想される。ある報告によると、現在のシニアは身体・知力・病気の面で10～20年前と比較し、5～10歳若返っている[2]。さらに60代以上のフィーチャーフォンが約5割、スマートフォンが約2割利用されており[3]、この世代においても既にICTが普及している現状がある。こうした状況をもとに、モバイル社会研究所では、シニア世代の生活をより豊かにするために必要とされること、ICTが貢献し得ることは何か検討することとした。

検討を開始するにあたり、まずはシニアの生活の実態を調査し、得られたサンプルからシニアを類型化し、その特性を明らかにする。本報告はその調査結果であり、第1部で「日々の生活」と「ICT利用による人間関係への影響」の類型化、第2部では類型化したシニアの特性を報告する。

### 2. 調査概要

調査時期：2015年10～11月 調査対象：関東（1都6県）在住、60～79歳男女

標本抽出法：QUOTA SAMPLING 性別・年齢・居住地（都市規模）で割付 530サンプル回収

調査方法：訪問留置調査

### 3. 調査分析手法

①シニアの日々の活動状況を調査するため、モバイル社会研究所では湯沢が高齢者の生活状況を掌握するために行った調査[4]や、山田が行った高齢者の生活実態調査[5]、さらには各自治体や民間が主催するカルチャースクールを参考に、地域での活動2項目、カルチャースクールでの活動2項目、人との交流2項目を設定し、オリジナルの「シニア日々の活動スケール」を設定した。

②また、ICTによる人間関係を調査する尺度は、飽戸ほか[5]が2003年及び2010年に行ったライフスタイル研究[5]で使用した、ケータイの利用と人間関係への影響の関連を見出すため使用した尺度を参考に、今回の調査で明らかにしたい人間関係の拡大・深化に関わる4項目を残置し、あらたに深化に関する1項目、悪影響に関する1項目を加え、表4に記載の6の質問を作成し、こちらもオリジナルの「シニアに関するICT利用による人間関係スケール」を設定した。

①は回収した530サンプルを②は530サンプルの内ICT端末の利用者、470人の回答について、それぞれ因子分析（因子抽出法：主因子法、回転方法：バリマックス回転）を行った。さらに、因子分析から得られたデータの因子得点から非階層クラスター分析（方法：K-means法）を行った。

#### 4. 日々の活動に関する調査結果

シニアの日々の活動の調査結果の単集計を表 1 に示す。自治会や奉仕活動といった地域活動には 3 割程度、教室への参加は 2 割程度、仲間や家族との交流は 6 割程度が積極的に交流しており、アクティブなシニアの日々の活動状況が垣間見られた。

表 1：日々の活動の状況の単集計（積極的(おこなう、たまにおこなう)と答えた比率) n=530

自治会・町内会・老人会の活動	36.7%	奉仕・ボランティア活動	25.5%
教養・芸術・料理などの教室	19.8%	体を動かす教室	21.8%
仲間・友達との交流	61.8%	家族・親戚との交流	56.4%

まず、シニアの日々の活動 6 項目について因子分析を試みた結果が表 2 である。特定された因子は「地域組織に参加」「教室に参加」「仲間・家族との交流」の 3 つである。これら 3 つの因子を用いてクラスタ分析を行った結果、表 3 に示す 4 つのクラスタが折出された。それぞれのクラスタについて、地域組織への参加特に高いクラスタ 1 は「地域で活躍」、仲間・家族との交流が高いクラスタ 2 は「仲間・家族中心」、どの因子もマイナスであるクラスタ 3 は「消極派」、教室に参加が特に高いクラスタ 4 は「教室で生き生き」と命名した。各クラスタの因子得点の平均値は表 3 に示す。

表 2：日々の活動の因子分析

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子
	地域組織に参加	教室に参加	仲間・家族との交流
自治会・町内会・老人会の活動	0.69	0.19	0.10
奉仕・ボランティア活動	0.66	0.05	0.09
教養・芸術・料理などの教室	0.15	0.70	0.14
体を動かす教室	0.07	0.57	0.12
仲間・友達との交流	0.14	0.25	0.56
家族・親戚との交流	0.05	0.05	0.54

表 3：日々の活動クラスタ分析

		S1:地域で活躍	S2:仲間・家族中心	S3:消極派	S4:教室で生き生き
n		66	259	130	59
人数構成比		12.8%	50.4%	25.3%	11.5%
因子	地域組織に参加	1.4	-0.3	-0.2	0.1
	教室に参加	-0.1	-0.2	-0.3	1.7
	仲間・家族との交流	0.4	0.3	-0.9	0.4

地域で活躍や教室で生き生き活躍しているシニアが、それぞれ 1 割強存在し、アクティブな日々の生活実態が垣間見える。また仲間や家族中心に交流しているシニアも約半数存在する。その一方、どの活動についても消極的なシニアも 4 分の 1 存在している状況が明らかになった。

## 5. ICTの利用による人間関係への影響に関する調査結果

シニアのICTの利用による人間関係への影響の調査結果の単集計を表4に示す。家族との交流が密になったと答えた人は5割を超え、続いて知人や友人との交流が密になったと答えた人も4割を超えた。それに対して、交際範囲が広がった・旧友との交流が復活した・新しい友達ができたと答えた人は、2割程度であった。このことから、人間関係が「広がる」より「深化」する項目が高い傾向であった。また、悪影響が出たはほとんどいなかった。

表4：人間関係の単集計(そう思う・ややそう思うと答えた比率)

n=470

交際範囲が広がった	23.8%	新しい友達ができたと答えた	17.4%
旧友との交流が復活した	21.5%	知人・友人との交流が密になった	42.6%
家族との交流が密になった	51.1%	人間関係に悪影響が出た	2.8%

次に、人間関係への影響6項目について因子分析を試みた結果が表5である。特定された因子は「広がり」「深化」「新しい友達」の3つである。これら3つの因子を用いてクラスタ分析を行った結果、表5に示す4つのクラスタが折出された。それぞれのクラスタについて、どの因子も低いクラスタ1は「消極型」、深化が高いクラスタ2は「深化型」、広がりが高いクラスタ3は「広がり型」、クラスタ1と対照的にどの因子も高いクラスタ4は「双方型」と命名した。各クラスタの因子得点の平均値は表6に示す。

表5：人間関係の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子
	広がり	深化	新しい友達
交際範囲が広がった	0.79	0.26	0.26
新しい友達ができたと答えた	0.60	0.28	0.46
旧友との交流が復活した	0.48	0.29	-0.05
知人・友人との交流が密になった	0.45	0.62	-0.19
家族との交流が密になった	0.20	0.60	-0.04
人間関係に悪影響が出た	0.14	-0.03	0.12

表6：人間関係のクラスタ分析結果

		S1:消極型	S2:深化型	S3:広がり型	S4:双方型
n		242	101	41	61
人数構成比		54.4%	22.7%	9.2%	13.7%
因子	広がり	-0.5	-0.3	1.2	1.6
	深化	-0.6	0.7	0.2	0.8
	新しい友達	0.1	-0.8	-0.4	0.9

深化型・広がり型或いは両方影響があった双方型が合わせて、45.6%となり、シニアのおよそ半数がICTを利用することにより、人間関係に「拡大・交流」の影響を受けている状況が明らかになった。

## 6. 考察

上記のとおり、ICTの利用により高齢者においても、交際範囲が広がったり、新たな友人ができるなど人間関係に「広がり」が生じたり、知人や家族との交流が密になったなど「深化」をもたらすことが示唆された。また、表7の通り日々の活動と合わせてみると、地域で活躍は人間関係で双方型、教室でいきいきは広がり型、仲間や家族中心は、深化型の構成比が高い。

森ほか[7]は高齢者のICTの利用は、孤立リスクの高い高齢者のコミュニケーションを実現するツールとなるだけでなく、中高年の主体的な社会参加の武器となりうることが示されている。今回の調査においても、日々の活動が積極的な人は、ICT利用の人間関係への深化・拡大の影響が高かった。その一方で、日々の活動で消極的なグループも存在し、そのグループはICT利用による人間関係への影響も消極型が高い。このような人たちに対しても、ICTができる可能性は何かがあるか、今後の研究課題といえよう。

また、それぞれどのような特徴（属性・ICT利用）を持っているのか詳細については、第2部で報告する。

表7：日々の活動クラスターと人間関係クラスターの相関

		人間関係クラスター			
		双方型	広がり型	深化型	消極型
日々の活動 クラスター	教室でいきいき	22.0%	<b>16.0%</b>	18.0%	44.0%
	地域で活躍	<b>25.8%</b>	9.7%	19.4%	45.2%
	仲間家族中心	12.4%	7.1%	<b>28.4%</b>	52.0%
	消極派	5.2%	8.3%	15.6%	<b>70.8%</b>
	平均	13.9%	8.8%	23.1%	54.3%

## 7. 参考文献

- [1] 内閣府(2015)「平成27年版高齢社会白書」
- [2] 読売新聞「高齢者5～10歳若返り」(2015.6.15朝刊付)
- [3] 総務省(2015)「社会課題解決のための新たなICTサービス・技術への人々の意識に関する調査研究」
- [4] 湯沢昭(2011)「地域力向上のためのソーシャル・キャピタルの役割に関する一考察」『日本建築学会計画系論文集』76(666), 1428-1432
- [5] 山田一隆(2000)「地方都市における高齢者の生活実態と生活意識からみた類型化-京都府舞鶴市におけるケーススタディ-」『政策科学』, 8(1), 171-185
- [6] 飽戸弘・他(2011)「ケータイ・ライフスタイルの時系列的考察(1)」『日本行動計量学会第39回大会抄録集』, 1-4
- [7] 森やす子・他(2013)「ICTによる高齢者孤立防止ネットワーク構築」『社会情報学会(SSI)学会大会研究発表論文集』, 3-6